アーキペラゴとボーダーランド
―文学受容の越境論をめぐって―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
田中敬子（たなか・たかこ）

「越境する文学」とは、重複表現である。文学は、我々の社会や心の中にあるさまざまな境界線を越境するものだから。「越境する文学」というテーマの共同研究では、便宜的に狭義の定義として「作者が母語によらない言語で書く文学」という説明がなされる。しかし「越境する文学」主催二〇〇六年十二月のシンポジウム（於名古屋市立大学）で沼野充義氏も指摘したように、作家にとって、母語そのものが何かあいまいな状況も多い。言語と国境の越境、という具体的な越境に限っても、多和田葉子のように、母語でない言語で書くことを自由意志で選択する場合、バラティ・ムカジーのように、故国で複数言語が使用されていて英語も公用語であり、彼女が移住先の北米で英語で書くことにほとんど支障がない場合、マキシン・ホーン・キングストンのように、一世移民の両親の元で中国語を聞きながら、出生国の英語を母語とする場合、また、やむを得ず国境を越える選択をする亡命者の場合（それもウラジミール・ナボコフのように亡命先の言語に堪能な場合と、そうでない場合によって異なる）、より切羽詰った難民の場合など、越境する個々の作家の状況は千差万別である。

以上のことは、作家の側の越境問題といえる。一方、文学テクストそのものは、言語と国境に関して次のように分類されることが多い。すなわち、二つ以上の言語の越境に敏感で、言語実験的な要素が強調されるテクストと、植民地と帝国主義国家の闘争や、民族ナショナリズムに対する抵抗が強調されるテクストである。もちろん、この二つの要素は、ひとつのテクストに同時存在できる。たとえばジェイムズ・ジョイスは、大英帝国の圧倒的な力の下に屈している故国アイルランドについての作品を、離国者として英語で書き続けた。彼はアイルランドのゲール語復興運動に共感と反発を覚え、『ユリシーズ』で一九世紀的な小説の枠組みを解体し、『フィネガンズ・ウェイク』では多言語を意識して、それこそ「オムニフォン」[1]へ関心を広げている。二〇世紀を代表するモダニストの言語実験は、国家批判やトランスナショナルなものへの希求と複雑に絡みあって切り離せない。しかし読者や批評家はしばしば、言葉とそれが伝えるとされる内容の間に境界線を引いて読んでしまう。

このような傾向は、ジョイスにも触発されて小説を書き始めたアメリカの作家ウィリアム・フォークナーのテクストについてもいえる。フォークナーの前期作品は、ジョイスに劣らぬ前衛的な言語実験とみなされている。南部の奴隷制に真っ向から挑んだ中期の小説『アブサロム、アブサロム！』でも、言語秩序から逸脱しようとするテクストの言葉のありようが、南部家父長制社会批判と明確に結びつけられるようになったのは、一九九〇年代、ポストコロニアリズム批評が盛んになったのちのことである。

そのなかでマルチニック出身の作家エドゥアール・グリッサンは、異人種混交というテーマにこだわるフォークナーをクレオール論[2]から新たに論じた。コロンブスの「アメリカ発見」から五〇〇年という一九九二年を節目に、アメリカ研究やアメリカ文学研究では、「アメリカ」の見直しが盛んである。グリッサンやポストコロニアリズム批

評が提唱した「プランテーション・アメリカ」[3]は、クレオール論とも関連して、アメリカ南部とカリブ海、さらには南米大陸の北東海岸までを結んで奴隷制の歴史、植民地経済について新たなパラダイムを形成する。それはアメリカ合衆国だけを対象とする、いわゆる「アメリカ文学」の地平を超える。(アメリカ文学は二〇世紀前半まで、英文学からの分離独立に重きを置いていた。よってF・O・マシーセンが主張したように、民主主義を表象する文学と考えられて、侵略や奴隷制の過去は無意識のうちに回避されていた。)アメリカ人は、他人種搾取という自らの歴史をできる限り直視せずにすませてきた。しかし一国を超えた「プランテーション・アメリカ」という関連地域でくくると、今まで国別の文学の枠組みで、または同じアメリカ文学でも時代別にばらばらに論じられてきた作家たちの、隠れた共通の関心が浮かび上がる。その関心、すなわち黒人奴隷制が敷かれていた故に彼らがテーマとせざるを得なかった混血や異文化混交のクレオール性は、アメリカ合衆国のみならず西洋の啓蒙主義、近代化を批判することになる。

それでは同じく越境論として、ここ一〇年ほど大きな力を持ち始めた「ボーダーランド」論は、新たに文学受容のカテゴリーを越える——少なくとも境界線を大きく引きなおすことができるだろうか。グリッサンは、プランテーション・アメリカの地域にメキシコも入れている。しかし「ボーダーランド」は、カリフォルニアからテキサスにかけてアメリカ合衆国と国境を接するメキシコを中心とした概念で、ヒスパニック系のホセ・ダヴィド・サルディバルやグロリア・アンサルドゥーア[4]らによって形成されている。ボーダーランドという言葉誕生には、マリー・ルイズ・プラットの「コンタクト・ゾーン」、レイモンド・ウィリアムズの「ボーダー・ゾーン」など、ポストコロニアルな基本概念が貢献している。特にプラットは、グアダルーペの聖母をめぐる北米から中米にかけての論考で、多数派と少数派が相互の文化を取り込み、聖母マリアのイメージが変容するさまを語って、ボーダーランド論に大きな影響を与えている。メキシコを中心とするヒスパニック系の人々は、巨大なアメリカ経済、文化に飲み込まれながらも、自文化をしたたかに広げて白人文化に影響を与え、国境をあいまいにし、なし崩しにする。ボーダーランド論は、アメリカ合衆国に流入するヒスパニック系人口を密入国ではなく、移動のダイナミックなパワーとして積極的に捉えて、クレオール論と同じく混交性や交通性を強調する。

マルチニック出身のグリッサンは、自らのクレオール論を膨らませる過程でカリブ海地域の特徴(アンティヤニテ)に着目してきたが、その重要なイメージのひとつに「アーキペラゴ」(群島)がある。同じ越境論のカテゴリーにあっても、アーキペラゴとボーダーランド、さらにはポール・ギルロイが『ブラック・アトランティック』[5]で展開した、アフリカ系を中心に再構成する大西洋環帯など、越境論として提唱される概念は、提唱者の出身、または研究対象の地政学によって、少しずつ違った越境空間となる。アーキペラゴとボーダーランドは、ともに複数文化を取り込む柔軟性を強調するイメージだが、やはり微妙な違いがある。アーキペラゴは個々の島の独自性と多様性を示し、また今福龍太氏が指摘するように「多島海」とも訳されて、島か海かどちらが主役ともなりうるあいまいさを持つ[6]。それに対しボーダーランドは、せいぜいフェンスか川で隔たれた陸続きの国境で、簡単に越境できそうな反面、じかに隣国と接する緊張がある。

ボーダーランド論は、ルドルフォ・アナーヤ、アメリコ・パレーデスなどチカーノ作家のテクストにも適用されるが、特にアンサルドゥーアやサンドラ・シスネロスなどチカーナ(メキシコ系アメリカ人女性)作家が戦闘的に用いる概念である。アメリカとメキシ

コ、白人とヒスパニックという境界に加えて、チカーナは、メキシコ文化の男尊女卑という二重差別にもさらされる。その結果、彼女らはメキシコ内部のメスティーソ、インディオの差別などにも敏感で、ボーダーランドの意識をより先鋭化させる。アンサルドゥーアに言わせれば、ボーダーランドとはメスティーサ意識なのだ。人種や階級、住む地域によって同じメキシコ系でも差別や反目があることは、チカーナでなくとも、感じている。しかし彼女たちは、国境内外で境界を越える戦いを挑み、自文化のボーダーランド化も促す。よってアステカ文明を滅ぼしたスペイン人コルテスの愛人かつ奴隷であったアステカ女性マリンチェになぞらえられて、裏切り者呼ばわりされることにもなる。

クレオール論は、黒人と白人の混血に限らず、すべての雑種性、異文化の混交に適用可能な概念とされる。ではボーダーランド論は、ヒスパニックという地域性に規定され、独自の視点からその特徴を説明して越境論に貢献するのだろうか。それともボーダーランド論も汎用性があり、クレオール論と同じように、たとえば白人男性作家フォークナーのテクストにも応用可能だろうか。フォークナーは、定住を基本とし、ヨクナパトーファ郡という想像の共同体を創造し、その地図まで書いた。しかし一方で、漂流、移住、越境する者への意識を常に持ち続けている。チカーナ作家サンドラ・シスネロスは差別をばねに、複数文化をまたぎ、ヒスパニック系アメリカ人のハイブリッドなアイデンティティを強力に主張する。シカゴやテキサス、メキシコを舞台としてそこをボーダーランド化する彼女のテクスト空間と、フォークナーの定住テリトリー中心のテクスト空間を、「ボーダーランド」概念を用いて比較検討し、両者に有意義な結論を引き出せるだろうか。

さまざまな越境論が、主流文化の中にいるすべての作家のテクストに適用可能とは限らない。あくまでそれを要求すると、西洋の普遍性信仰に立ち返る。しかし自分とは関係ない他者の、地域限定にみえる論理が越境してこちら側の判断基準を変化させ、両者が新たなカテゴリーを形成するのが、越境論のひとつのダイナミックスである。また、多数派、少数派にかかわらず、その共同体内にとどまって体制批判する作家も内部で危険視されて、自らがボーダーランド化する。アメリカ合衆国は、植民地としてイギリスからの独立を果たした後、民主国家建設の名の下に、買収や侵略によってボーダーを押し広げ続けた。そのような記憶を留めているアメリカ作家たちは、白人でもチカーナでも、多様な越境が可能なはずである。彼らがこの国の多層化し、抑圧された歴史空間を照らし出し、さまざまな越境論が合衆国の理想を周辺から突き崩し、読者が自らの文学空間を押し広げていけば、世界の風通しはもう少しよくなるのではないだろうか。

注

(1) 菅啓次郎『オムニフォン』(岩波書店、二〇〇五)、三〇。

(2) 菅氏は、グリッサンが「クレオリザシオン(クレオル化)」という言葉を使っていることに注意を促しているが(同上、二五)、ここでは「クレオール論」で通した。

(3) cf. Hyatt, Vera Lawrence, and Rex Nettleford, eds. *Race, Discourse and the Origin of the Americas: A New World View.* Washington, D.C.: Smithsonian Institution P, 1995.

(4) Anzaldúa, Gloria. *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza.* San Francisco: Aunt Lute, 1999. Saldívar, José David. *Border Matters: Remapping American Cultural Studies.* Berkeley: U of California P, 1997.

(5) 上野俊哉、毛利嘉孝、鈴木慎一郎　訳『ブラック・アトランティック――近代性と二重意識――』(月曜社、二〇〇六)

(6) 今福龍太『アーキペラゴ』(岩波書店、二〇〇六)、二九。

＊小稿は科学研究費補助金基盤研究B「越境する文学の総合的研究」(平成一七～一九年度)の成果の一部である。